

## 2011.3.11 からの避難経過から、避難路確保の大変さを報告します

2014. 3. 2 浪江町 菅野みずえ

福島県は東北の一番南に位置する2番目に大きな県です。



### ◆地震時の避難

地震の起きた日は大熊町、原発から数キロのところまで働いていました。午後から夜中までの間に数回の地震があったのですが、何れも震度6～7に近いものでした。家からいつもは45分の通勤距離を、この日家まで3時間半かかりました。人とは反対方向の信号も切れた田舎道でこれだけ掛かっています。

あの日、遠いからすぐ帰れと職場の上司に言われ、明日の土曜日でも出られますと伝えて、また明日と同僚と別れたままになりました。

ガソリンを入れようとして、地震と停電とが重なり、スタンドが閉まっていて補給できませんでした。いつもの道を帰ろうとしてしばらく行ったところで、すれ違う車はみなわたしに向かってバツ印を出していました。通れないと言う意味は解ってもUターンできる場所は無く、後続車にせかされるように先へと進みました。2キロも進まないうちに警察官に止められ、此処から先へは通れない、まっすぐも左折も崩壊している。国道は津波被害で渋滞し進めないと知らされました。三叉路で引き返した道で、揺れる度に道が地割れし、段差ができ、今来た反対車線が陥没し、車が逆さまになるのを見ながらどうすることも出来ませんでした。パニック映

画の中に居るような、自分がそこに居るのが信じられない気持ちでした。県道を隣村から我が家へ抜けようと走る県道には電線がたるんで垂れ下がり、山の崩落止めのフェンスは破れ、大きな石がそこかしこにあり、それを避けながら右左にとハンドルを切りながらも、落ちてくる石を避けながらの運転は必至で、あの時は運転歴の中で一番上手であったろうと思います。電線に触れたら死ぬ、岩に当たったら死ぬそう思いながら、南無大師遍照金剛と無意識に唱えていました。苦しい時の神頼みというより、落ち着ける言葉がこれしかなかったのです。

やっとたどり着いた葛尾村は、体育館の土手斜面が道に崩落して道を塞ぎ、通れないとのこと、山道を通るしかないと言われ登り始めたものの、道には膝ほどの雪があり、車高の高い4輪駆動でしたが、山道が崩落していたとき引き返す道幅が無い様な山道でした。これから浪江へ帰ると言う工事車両が2台居て、この道は獣道に近い、普段使われていない道だ。この先の町から、峠を越えて葛尾の崩落していないところへ抜ける峠道がある。その方が安全かもしれないと、わたしを真ん中に挟んで連れて行ってくれるとのこと。4月までは遅い雪が降ることがあり、まだ冬タイヤを履いていました。その峠は地震でなのか雪崩が起き、峠道を塞いでいましたが、Uターンできる場所は何処もなく進むしかありませんでした。一度なだれたところは大丈夫、そう言い聞かせて、雪崩れた雪の上を必死でついて行きました。浜通りは4月まで重い雪が降るところです。硬いしまった雪の全層雪崩であったことが幸いしたと思います。パウダースノーの表層雪崩であれば車が埋まって越えられなかったでしょうし、硬い雪でも車高の低い車であったならば越えられなかったと思います。道がなくなった雪の上を斜めになりながら、前の工事車両が付けてくれた轍の後を踏み外さない様に運転しながら、生きている、大丈夫生きていると念じていました。やっと峠を下りると、村への道には通行止めの柵があり大きく稲妻が走ったように真ん中が地割れし、道路の両脇は崩落していました。でも引き返すことは選択外でした。工事車両の人がヘッドライトをつけ、割れに石を投げると、はるか下で音がしました。この幅ならゆっくり、地割れを両輪で挟んで下れば何とかなる。誘導するから1台ずつ降りよう。それしかない、誰しもそれはよく分かりました。稲妻割れを脱輪したら、と思う不安を打消し、生きて帰るそれだけを思っていました。怒号の様な指示に従い右左とハンドルを切りながら必死でした。家への分かれ道でクラクションを鳴らしてお礼を伝え、我が家への道を辿ると次はスケートリンクの様なアイスバーンの峠の長い下り坂でした。しかも、ここも各所で崩落や陥没があり、ブレーキはかけられないと思いながら、冬はほとんど使う人のいない道を我が家へと必死でした。これが11日のことです。

#### ◆複合被災

地震だけの避難でも上記のような困難さがありました。それが原発事故避難となればもっとそこに、命を守りたい人の心の平常さを失った必死さが加わります。各地の原発は過疎地にあるのです。同じような山道が必ずあります。冬の日本海側で除雪されていない、雪崩の起きた山道をどう避難するのか、原発のそばを通らないと逃げ道のないところは必ずあります。その住民が切り捨てられないとは言えないと、我が身で思います。爆発したら2時間以内と言われますが、地震だけの帰宅で30キロを3時間以上かかっています。人と反対方向でこれだけです。みなが集中したらとんでもない事です。

12日浪江町はわたし達の一番北の津島地区へ避難命令をだし、わずか町役場から20キロ

が大渋滞で人口1万2千人の人の8割がこの道を通ったことで、最長10時間から12時間掛かった人がいます。1本しかまっすぐ通れる道は無いからです。原発のある町の多くは過疎地であり、同じような状況が出ると思われれます。この日交通事故も避難路で幾つも起こり、パトカーが事故で走っていました。

#### ◆災害弱者

各入居施設は自力では全員避難させる輸送能力は無く、公的支援を待たざるを得なくて取り残されたところが多くありました。入院病床を持つ病院も同じでした。特に老人病院、精神病院はとても悲惨であったと報告されています。

車を運転できない高齢者は町からのバスを体育館などで待つしかなく、車で避難できない人は家族同様でありながら、ペットも置いて来るよりほかありませんでした。

自分で判断可能であっても、情報が無い中、どこへの道を取って行けば安全か。停電した町からの避難は大変なものでした。ましてや、情報を知ることが困難な障害を持った方たちは避難そのものから取り残されました。情報を得られても、障害によっては多数の人が避難している体育館などは、パニックや、不安症状が昂進する恐れから、避難そのものを取りやめる人も居ました。浪江町は当時人口1万2千人。施設等もあり障害者は1割を占めていたと記憶しています。

#### ◆町が原発事故による放射性被害を避けるため全町避難の決定

15日8時に10時全町避難の指令が出ました。降り出した雨に飲み水の汚染の心配と、わずか千人に満たない地域に、急遽8000人を越し、ピークは近隣の町からも含め12000人に増えた津島地域。トイレなどの受け入れが不能になって、住民からの此処も危ないのではと進言が相次ぐなか、国からも県からも危険を知らせる連絡は全くない中で、中通二本松市への打診をしていた町は受け入れの返事を受け取り、全町避難を発表したのです。

これまでの学習から、もう二度とこの家には戻れないと思いました。冷蔵庫冷凍庫をカラムにし、家に在った総ての生もの、農家ですから春用の種、苗類も全て畑にだし、せめて生き延びてと、鉢植えの植木を畑に預け、ガソリンが無く耕運機からも抜き、燃料の少ない普通車は置いて、リッタ辺りの走行数が長い軽自動車に、買える衣類は最低限、その他どうしても要ると思うものを、犬の居場所を確保して家族それぞれ二人で選り車に積み、家を出たのは雨が降り始めた15時過ぎでした。短時間に人生の結論をこのように突き付けられることがこの先あってはならないと思います。

雨の中、郡山で3時間並んでスクリーニングを受け、高い放射線量で上着を没収され、髪を洗えと言われても断水で洗うところはありませんでした。車のリッタ辺りの最高走行速度を気遣いながら地道を関西へと向かいました。ナビには頼れず観光会社を経営する幼馴染に今通れる道を教えてもらいながら、何処で並んでも燃料補給は出来ませんでした。

地元の人と避難しようと言う息子と、より安全な関西へ息子だけは連れて行きたいわたしと、二人とも精神的に極限状況で、派手な親子げんかで2時間近くもロスしながら、携帯での娘のとりなしで大阪行きを納得した息子と一晩中交代で運転しました。

翌朝6時を過ぎ軽井沢を越えたあたりで、今ちょうど開くガソリンスタンドがありました。恐る恐る、入れてもらえるか尋ねると満タンかい？と聞かれました。大阪ナンバーであったことも幸いでした。満タンにしてもらってようやく高速に乗ることが出来、ガソリンを持って迎えに来てくれた夫と弟に連絡を取り合い高速の途中で会うことが出来ました。長野まで家を出て16時間以上かかっています。パーキングでスタバが普通に開いていたことも信じられませんでした。スタバで普段飲まない甘いキャラメルカフェにぼとぼと涙が落ちて不審がられたことが忘れられません。

福島県から北関東辺りまでは、渋滞が酷く、燃料が無くなって立ち往生する車も居て、一寸ずり状態もありましたが、関西に逃れた人は少なかったこと、国からも県からも見捨てられた浪江町住民で、爆発から既に三日経っていたこともあって、軽井沢を過ぎてこの時間で避難できたと思われます。この避難の間も東北の地震に誘発されて茨城県沖、静岡県沖、長野県、愛知県と地震が立て続けにあり、恐ろしい思いをしながら福島から途中の岐阜県まで南下しましたが福島を出てから23時間以上かかっています。普通は9時間の距離です。

#### ◆今、体験して願うこと

「浜通りの原発立地の町は、爆発の前に、国が全町避難のバスを11日差し向けていたが、地震と津波の道路状況から12日朝になった」と、事故後1年半経って福島地元新聞が報じています。しかし、浪江町、飯舘村、南相馬市などにはスピーディの予測は知らされることはありませんでした。特定秘密保護法が公布されたなら、事故其のものがただちに国民に知らされることはなくなる恐れもあります。だから、国は速やかな避難路の確保など細やかに作るつもりが無いのではないかと危惧します。

蛇足ですが、今出来る事、特定秘密保護法を無くす努力をしながらも、いざというとき発表されないことを念頭に、ソーラーの空間放射性物質を検出できる機器を誰の目にも見えるように、各町に設置してほしいと思っています。いざという時を住民が自分で判断できるように。40歳以下の方はヨウ素剤もお守り代わりに必要かもしれません。遠くても、今食べる食料が安全か、学校給食で街の各所で、持ち込んで測ることが出来る設備が不可欠だと思っています。そういう時代にわたし達は生きています。

「福島を忘れない」と言う言い方をよくされます。何故「忘れない？と」、忘れないとは過去に向かって言う言葉。今始まったばかりの福島原発事故、本当の恐ろしさはこれからです。水面下に、地下に、人の、動物の身体の奥底に潜んで現れて来ていない恐ろしさが、これから始まろうとしているのに、「忘れない」と思うことは無意識に終わったこととしている言葉だと、どうぞ気付いてください。福島とフクシマに繋がるすぐそばにある原発の危機を「福島を思う」と言い換えて、見つめてください。お願いいたします。

ありがとうございました。